

# 幸田弘子の会

「あらの  
曠野」  
「にっこりえ」

## 幸田弘子の会

「あらの  
曠野」

堀辰雄

「にっこりえ」

樋口一葉

出演

フルート演奏「曠野」

幸田 弘子  
大和田葉子

演出

作曲「曠野」

池田 一臣  
坂田 洌隆

音楽「にっこりえ」

宇野誠一郎

音響

広野 昌弘

照明

橘田 克美

衣裳(幸田弘子)

ギヤラリー・みやぎ  
末広屋(辻光代)

(大和田葉子)

桂 けい

舞台監督

大橋 宏康

題字

加島 祥造

対談写真

浅野いずみ

印刷

瞬報社写真印刷株

二〇〇七年十月二十日・五日 紀尾井ホール

# 堀辰雄の世界

対談 堀多恵子／幸田弘子



## 堀辰雄作品の魅力

**幸田** この追分のお家、すてきなお庭ですね。野の花がたくさん咲いていて。

**堀** よく手入れもできないんですよ。こんなところですけれど、いろいろな方たちがお見えになって、主人の話をして下さるのです。

**幸田** 多恵子先生ご自身も、すばらしい文章家でいらつしゃいます。

**堀** いえいえ。わたしは堀の思い出はお話ししたり書いたりしてきましたが、作品について語ることはなかなかむずかしいですね。

**幸田** 軽井沢に大買ホールができて、わたしも朗読をすることになったとき、ぜひとも軽井沢ゆかりの堀辰雄先生の作品を読ませていただきたいって、ま

つさきに考えたんですよ。それで、すぐ多恵子先生にお目にかかりたくって、このご自宅にうかがったんですね。そしたら快く会ってくださいって、朗読もお許しいただきました。やりたいようにおやりをさいて、励ましていただいたんです。わたしはその場ですぐ、堀多恵子ファンになってしまいました。

**堀** まあ、そうでしたの。

**幸田** こんなすばらしい方がいらつしゃるのかって、感動してしまつて。おかげさまで最初の年は、「風立ちぬ」の一部を大買ホールで読ませていただくことができました。去年は初刷のものというところで、「ルーベンスの偽画」を舞台に乗せました。そのあと、東京の田端文士村記念館からお招きを受け、「曠野」を朗読させていただいたんです。その時は時間的な余裕もなくて、ただ

必死になって読むだけでした。次に、  
軽井沢で今年あらためてやはり「曠野」  
を読むことになって、そのときにははら  
やんと準備をしたと思っただけです。足  
りないという思いがあったので、さら  
に今回、東京の紀尾井ホールで、樋口  
一葉の「にこりえ」とあわせて朗読す  
ることになったんです。

編 一葉はもう、ずつと何十年もお  
やりになっていらつしやいますものね。

幸田 はい。その「にこりえ」と「曠野」  
を、稽古のために合わせて読んでみま  
したら、最後のところがふたつとも、  
聞せずしてニユアンスがよく似ている  
ことに気づいたんです。ふたつの作品  
は「死」というかたちで終わっている  
んです。テーマじたいも、不幸な女  
性の生き方という点でつながるものが

あって、どこまで深く読んでも読み足  
りないんじゃないかって、そんなこと  
まで思いました。ふたつの作品がお互  
いに照らし出すみたいに、あらためて  
読み方を考えなければならなくなっ  
たんです。

編 本当にありがとうございます。  
舞台で読んでいただきますと、またそ  
れがきっかけになって、はじめての方  
でも編の作品にふれてみようかな、な  
んて思ってくださるかもしれません。  
ありがたいことです。

幸田 わたしたちが女学生だったころ  
は、みんなが堀辰雄先生の作品を読ん  
でいました。「風立ちぬ」などは、あの  
なかの「風立ちぬ、いざ生きめやも」  
という文章を、みんな陶然となつて暗  
唱したりしていたんです。それで、半  
世紀以上たつてみると、大学生の嗜好

なんかもずいぶん変わってきています。  
わたしが読んでもあまり面白くないも  
のが好かれていたりして、これはいけ  
ない、やはり本物の文学を伝えていか  
なくっちゃ、なんて思うんですよ。で  
もいまは少しずつ、古典に帰ってきて  
いるかもしれない、編先生の作品もそ  
うあってほしいと思います。

編 若い方ということで言えば、こ  
んな話をきいたことがあるんです。太  
平洋戦争に出征する学徒出陣の方が、  
たった一冊だけもつていく本として、  
編のものをあげていたって。中村光夫  
さんという評論家の方がお書きになっ  
ていらしたんですけれどね、そのときは  
まだ主人が存命でしたから、「はくの作  
品も何か役に立つことができたのかな。  
それほど無駄なことをしてきたわけで  
はなかったかもしれない」なんて、病

床で申しとおりましたの。哲学者の矢  
内原伊作さんも、「雑日記」をやはり戦  
争にもつていって、はろはろになるま  
で読んでいたって、その本を戦後にわ  
ざわざもつてきてくださったことがあ  
りました。

幸田 堀先生の作品は、読みたいものが  
いくらでも出てくるんです。有名な作  
品だからいいということじゃなくて、  
みんながいい。

編 それがね、わたしが結婚したと  
きに、堀がこんなことを言ったんです  
よ。結婚したということは、お互いを  
よく知っているわけだから、つまり一  
緒に住んでいる人間のことはよくわか  
っているんだから、わかっている者の  
書いた作品なんて読まなくていい、こ  
れまでのばくの書いた作品は目を通す  
なつて。

幸田 まあ。

編 ですからね、わたしは「風立ち  
ぬ」以外正直に、「ルーベンスの偽画」  
も「聖家族」も、ほとんど読んでおり  
ませんでした。でも亡くなりましてか  
らはね、やはり読んでおかなければこ  
まるということで、ずいぶん勉強した  
んですよ。

### 「曠野」の思い出

編 わたしはそれでも、「曠野」だけ  
は原稿のまま読んでいます。その  
ころは、編はずつと奈良の太宰のほう  
を巡っていたんですが、なにも書けな  
くて戻ってきました。雑誌の「改造」  
に執筆のお約束をしていたのに、なか  
なか書けなくて、帰ってきたときまだ  
一枚もできていなかったんです。で、

それから夜を徹して書いて、あれはよ  
くおぼえていきますけれども、東の空が  
だいぶん白んできたときに、「書いたから  
読んでみて、綴じて、編集者に渡して  
くれ」って言われましたの。そしてわ  
たしは、昔ですの、生原稿に紙のこ  
よりを通して綴じて、編集の方におわ  
たしました。ですから、あの作品  
はわたしの心のなかによく入っ  
て、大好きなんです。

幸田 そんなことがあったんですか。生  
原稿で、その「曠野」を最初に読まれ  
たとき、どんな感じをもたれましたか？

編 そうですね、もう筋はわかっ  
ておりましたけれども、やはり大和でい  
ろいろ考え抜いてきて、大変な仕事を  
短い時間でよく書き上げたものだと思  
いましたね。それに、あの主人公の女  
性がとてもかわいそうで、涙を流しな



から読んだ記憶があります。ほんとうは、もつとちがう小説を書くために一ヶ月ちかく奈良ホテルに滞在しておりました。でも秋の大和をあちこち歩いているうちに、すっかり大和に魅せられてしまったんですね。唐招提寺とか法隆寺とか、お寺に行つて仏さまの像を見ていると、自分の昔こうと思つていた小説がどこかにいつてしまった。はじめから天平時代を舞台にしたものを書こうとは思つていなかったけども、古い良いものをみているうちに、それができなくなつたようです。で、そのとき折口信夫先生の「古代研究」を読んで、日本の説話にいたく感銘を受けて、「靈異記」を読みたいと思つて京都に行つたんですね。そしたら、「今昔物語」に出会つて、そのなかで「曠野」の女性にめぐりあつたんでしょね。



**幸田** それは戦争中のお話でしたね。昭和十六年です。ですから戦火が激しくなりつつあるころで、わたしとしては早く家に帰つてきてほしいと思つていたので、そのかわりに毎日のように、わたしに手紙をよこしました。それはあとで「十月」という作品に実

**堀** 自分の仕事にはずいぶん誇りをもつていたようです。でも、もう体力的に長いものは書けなくなつていたんですね。「菜穂子」は、あれはずいぶんノートが残つておりまして、純粋な創造小説として、もつとすつと長いものになるはずだったんですけども。「曠野」は、朗読では、四十分くらいですか？

**幸田** はい。ちやうどそのくらいです。堀先生はもうそのころまでに、ずいぶん外国文学の翻訳などをなさつて、ご自分のお書きになるものでも、いろいろ文体の工夫をされていたようです。前に読ませていただいた「ルーベンスの偽画」と「曠野」では、まるで違う文体なのでびっくりしてしまいました。

**堀** 「ルーベンスの偽画」は、とてもちがつかしかったですよ？



た。ただ、軽井沢を知らない人には、当時の別荘生活の事情がわからないこともあつて、すこしややこしかったかもしれません。物語もあるようでないですからね。でも、あれにくらべると、「曠野」はとてむずかしいんです。聞いてくださるみなさんにとにかく伝えていかなければならないと思つて、自

るんですけれども。

**幸田** わたしも、「曠野」は大好きなんです。そんな深いいきさつがあつたんですね。

**堀** 本人もあれは好きだったようです。自分でもそういつていました。その前に書いた「かげろう日記」に出てきた女性は、ちやうど「曠野」の女性と反対のようですね。

**幸田** 本当に、すばらしい女性を書いていただいて、とてもうれしいと思つた。最後のあのシーンなどは、どう読んだらいいか、いまだに迷つているくらいです。「今昔物語」からヒントを得られたといつても、やはりせんせんちがいますものね。

### 知的な文章をどう読むか

分なりに研究して読んでみたんですが、あるとき演出の池田一臣先生に「それでは情緒的すぎるんじゃないか」と言われて、そこではつと気づいたんですよ。この作品は情緒で書かれているものではない。つまり、知的な文章、理知的な作品だと気づいたわけです。ですから「曠野」では、こういう文体をどうやってお客さんに渡していったらわかつていただけか、ずいぶん悩みました。ともすれば情緒に流れてしまいがちなものだから。でも、それではいけないんです。もつと離れて、原作の文体だけをしっかりと渡していけば、聞いている方は、それを深いものとして受け取つてくださるって思いません。わたしが勝手にへんなものを入れないで、あの乾いた文体だけを伝えていくべきだ、と。それがどこまででき

るかは、また別問題ですけれども(笑)。  
堀 おっしゃるとおりかも知れませ  
ん。これはよく知られていることです  
けれども、堀は、若いころは数学者に  
なりたいたいと思っていたんですね。高校  
の受験では「理科乙」という数学の学  
科を受けたんです。

幸田 そうだったんですか。それでわか  
るような気がします。

堀 ですから、よく言っておりました  
の。室生犀星先生は、思ったことをそ  
のまま書けば小説ができるけれども、  
ぼくは最初からノットをとって、しつ  
かり形を構成していかなければならな  
いって。堀の蔵書の並べ方なんかも少  
し変わっていたようですが、きちんと  
それなりの考えがあったようです。ほ  
くは天才ではないので、とにかく努力  
していかなければならない……。ひと

もお亡くなりになったんですね。

幸田 「曠野」は、王明時代風でありな  
がら、文章は並べ方がすごく新しく、  
知的で、日本語として特別のような気  
がします。言葉だけを信じて朗読して  
いきたいと思っていますけれど、乾い  
た調子でああいう哀しいことを書いて  
いるところが、すばらしいですね。海外  
の文学や日本の古典の研究をふまえた  
のちに、あらためて日本の心を伝えた  
いと思っただけで、そこが違います。  
堀 それは、とてもむずかしいこと  
ですね。読むのも、私は老人で耳が遠  
いので困ります。わたしは「曠野」を  
おぼえておりますから、幸田さんの  
朗読は入ってくるんですけども、耳  
のせいもあってちゃんと感想を申し上  
げられないところがつらいんです。声  
の高低なんかも、よくわからないこと

つ小説を書くにも、そうとう骨身を  
削ったようです。ただ書くことは好き  
だったので、若い頃は翻訳などはよく  
しておりました。

幸田 「曠野」も先生の頭のなかで熟し  
きって生まれたんでしょうね。あの作  
品のなかで、とくにどのようなシーン  
がお好きですか。

堀 男が訪ねてくると、女性は隠れ  
てしまおうでしょ。ああいうところがな  
かなかいいと思います。やはり、おち  
ぶれてしまったことを知られたくない  
と考えたんでしょうけれども。

幸田 顔を隠していても、男の涙が落ち  
てきて、それでふっと顔をあげて、相  
手がだれか気づいてしまつて……。あ  
の場面は、本当にドラマチックだと思  
います。形は王明風でありながら、感  
性的には、やはり近代のもんですね。

ろがありますし、幸田さんは、男の声  
と女の声は使い分けていらっしやる  
の？

幸田 いえ。声色ではないので、使い分  
けることは基本的にはしません。ただ、  
気持ちだけでいいんですね。男は胸を  
さらして声を出すことはあっても、女  
はそうしない、そのようなことは考え  
ながら読み分けています。この作品は  
とくに、そんなふうにも男と女の気持ち  
が伝わればいいと思っています。

堀 そうですね。そのことはとても  
だいじかも知れませんが、ところで、  
来年は何をお読みになるの？

幸田 「木の十字架」の予定でいます。  
せっかくだ大賀ホールですから、できれ  
ば賛美歌のコーラスなども入れて、な  
んで考えて(笑)

### 「曠野」から「木の十字架」へ

堀 折口先生は、堀のことをとても  
かわいがってくださったんですよ。わ  
たしたちが榎井沢に越してきましたら、  
先生も家を探したいとおっしゃって、  
夜鷹が鳴きながら飛ぶような寂しいと  
ころでしたけれども、わざわざたずね  
てきてくださいました。堀も、先生の  
「死者の書」などを今は読む人が少ない  
と言つて、残念がっておりました。す  
ごく尊敬して、心酔してましたね。  
「死者の書」をよく読んでいましたよ  
うで、もともとつといろいろな方に知っ  
てほしいと言つておりました。折口先  
生は、ご自分も病まれていたのに、た  
びたび堀の病床を訪ねてきてくださ  
いました。主人が亡くなつてすぐ、先生

国の子どもたちがでてきて、ああいう  
シーンはとても鮮やからしいですよ。

幸田 ちょうどあの聖パウロ教会が、う  
ちのすぐそばなんです。

堀 あら、そうですか。  
幸田 それで、前を通るたびに「木の十  
字架」のことを考えて、来年うまくい  
くように、お祈りしているんです。  
そして、多恵子先生のようなすばらし  
い方にお目にかかれたことが人生の本  
当の幸せなんだって、心のそこから感  
謝しています。

堀 おはすかしいですけど、とて  
もうれしいことですね。

幸田 お心に入つている「曠野」に、な  
んとかして近づきましょう、努力して読ん  
でいきたいと思つております。

(八月三十日 退分にて)



## イタリア賞受賞の思い出

### 磯村尚徳

この夏、榎井沢の大賀ホールで、初めて幸田弘子さんの舞台、そして生の声を伺った。マイクを使わないのに、ピアノシモにいたるまで後ろの席で綺麗に聞こえた。さすがである。

生とあえておことわりするのは、彼女のすばらしい朗読は、何度も放送で聞いたし、その意味では昔からファンの一人だが、生の雰囲気と迫力はまた格別だった。

私が彼女の録音の声に接したのは、何と半世紀近く前のこと。場所はヴェネツィアに程近いアドリア海に臨む港町トリエステ。そこで1960年にイタリア賞というRAI（イタリア放送協会）主催のラジオ・テレビ番組の国際コンクールがあり、NHKが出した音楽詩劇「オンディーヌ」（三善晃作曲・三善清彦演出）が見事グランプリを獲得した。その朗読を担当されたのが幸田弘子さんであった。

私は、その頃NHKの若い特派員で、パリのヨーロッパ総局にいたが、イタリア賞という当時最大の放送界のイベントのために動員され現地に出張していた。今の若い人には想像の域を超えるだろうが、敗戦後10年を過ぎたばかりの日本はまだ貧しく、外国に出かけるチャンスは極めて限られ、しかも、外貨持出し制限は厳しかった。外国に駐在している私たちは一人何役もこなす必要に迫られ、報道専門の私でさえ、音楽や演劇番組のお手伝いをしなければならなかったのである。そういう状況だっただけに、NHKの仲間がグランプリの栄冠に輝いたのが殊のほか嬉しく誇りにも思ったものだ。

受賞の内定を東京に通知すると、受賞者の三善さんだけでなく、自費支弁で、

奥さんの幸田さんも同行され受賞式典に出席されるとのこと。大慌てで受入れ準備をしてお迎えした。無我夢中で細かいことは忘れたが、神型ローマ帝国の面影をとどめる18世紀の城で挙行されたセレモニーは、演出上手のイタリア人だけに、忘れられない見事なもの、若いご夫妻が旅の疲れも見せず（直行便どころか南まわりでプロペラ機）立派に振る舞われたのを覚えている。

その後、当方は外国生活が長く、なかなかお会いできなかったのだが、幸田さんが、舞台朗読という独自の境地を開かれ多くの賞に輝かれたことを仄聞し、わが意を得た想いをしていた。というのはフランスでは、詩や散文の暗唱と朗読は幼い時から重視されていたからである。語り部の伝統がある日本で、声を出して読む風習がなくなりつつあるのを心配していただけに幸田さんのご活躍に心からの拍手を送りたいと思う。

私と幸田さんは、昭和28年、テレビ元年にNHKの内幸町に入局した、いわば同期生（黒柳徹子さんと同じ東京放送劇団）。今後ますますのご精進、とりわけ、何時までも生の声を聞かされるよう喉をお大事に。



## 大勝 信明

## 朗読の「ふるさと」

縄文時代後期の日本列島の、今の茨城県筑波の地を東端に。照葉樹林帯（樺や楠、椎の木等のように葉が太陽に照り輝き、椿油やナフタリン、椎の実のような食品、薬品になる実を付ける木々の群れ）が中国西南部を経て、西端はヒマラヤ・ブータンあたりまで拡がり、この地帯の人たちは、食物の腐敗する作用を変えて、酒や酢、味噌、醤油、納豆、豆腐等の「発酵食品」を創り出しました。

また、春秋には、人びとは野山に出て歌舞し、出会う相手と即興で詩文のような言葉を交わし合いながら、意作を願ったと伝えられます。特に若者たちによって交わされる即興詩が、生涯を共にする相手との出会いの絆になることもしばしばだったようです。これらの習俗は「歌垣」と呼ばれ、似たような行事はヒマラヤ山麓などに今なお伝えられているということです。

この時代のこの文化帯に住み合う人びととの間に、「文字」はなく、古代から、言葉による「表現」は音声表現によっていたのです。

因に、その後の日本には、中国大陸から朝鮮半島を経て、「漢字」が伝えられ、それを受け止めた「万葉人」は自分たちの発する言葉の「音（おん）」に近い文字を当てて、「万葉文字」を創り出して表記するようになったのです。

外来の「文字」を知った人びとは、特別の場合の「口伝」のほかには、「文字を

使って、伝える」作業に主力を置くようになりました。

史書や文学の確立はそのお陰だと言えましょう。しかしそれでも、「文字」は伝達手段であり、作者の伝えたいという「思い」は文字の奥にあるのです。

幸田さんも自著「朗読の楽しみ」の中で「家でも私の父は、食卓や書齋で新聞、本などを広げページをめくりながら声を出して文章を読みあげていました。私にとって、「音読」は自然なことだったのです。言葉は身体で味わっていたのです」と言われます。

「音読」は言葉による伝達・表現の基本に立ち返るものであり、「朗読」はそれを極限まで磨き上げ洗練したものといえましょう。

幸田さんは舞台上で朗読をする時にはマイクをえません。自分のナマの声で表現します。彼女は自分の身体を通して出るナマの肉声で、原作者が表現しようとする意味内容や思いを再表現したいと願っているのです。そのためには、当然のことながら電波メディアでの発声法の訓練は勿論、舞台上のナマの声で伝えられるための発声法の訓練を誰よりも厳しく自分に課しておられます。そして、幸田さんは「日本語の美しさは、音声表現である。朗読で「でしか残せない」とも言っておられます。照葉樹林帯人が聞いたら随喜の涙を流すでしょう。いや、幸田さんの「表現」のふるさは照葉樹林帯人のふるさとだったのではないのでしょうか。



## 感動を共有する

幸田弘子さんは女子美大を卒業してから昭和二十八年に、NHK東京放送劇団の門をくぐりました。当時のNHKはまだラジオの時代でしたがテレビ開始の波が押し寄せており、NHKの方針として放送劇団員も単にラジオドラマに対応するだけではなく、テレビドラマの要員としての訓練をさせようということで採用されたのが五期生でした。ですから、この期の人たちはテレビ要員としての一期生として採用されたのです。

私はNHKに昭和二十六年、東京の番組企画部門に入りましたので、幸田さんよりは二年先輩ということになります。幸田さんとの最初の出会いは、幸田さんたちが養成期間を終わったすぐ後、ラジオドラマのギャグ（定まったセリフはなく、群衆のギャグやとした創作的？セリフを言う群れ）の一人として出演を依頼した時でした。

しかし、幸田さんの才能は素晴らしいアツと言う間に才覚を現しラジオ・テレビ界の人気者になりました。もう、私どもの番組なんかは見向きもしないかと心配しましたが、案に相違して、出演依頼には何時も快く応じて下さいました。

幸田さんと私の仕事を通してのお付き合いは、もう五十五年を越えました。私が筑波大学の同窓会を経営基盤とする（社）茗溪会の理事の一人として担当する

公益事業の一つとして行う公開講座で、幸田さんの舞台朗読の公演を六年間、東京・茗溪会館で継続させてもらっております。各地から集まって幸田さんの「朗読」を間に、感動を共有する沢山の入びとの輪が一層拡がりあふれて参りました。そして、今年には私どもの母校のある、筑波。地区での朗読公演「樋口一葉の世界・十三夜」を開催することになりました。

幸田さんに加え、お嬢さんの三善里沙子さんの解説をまじえながらの、文芸公演は、平成十九年九月二十九日・土曜日午後二時から、満員のお客さんを迎えて大学会館で開かれました。

今回のリサイタルのほんの数日前のことでした。

（社団法人茗溪会理事）





## 鬼塚 正勝

音楽とは何なんだろうか？  
幸田朗説を聴きながら、突然、突拍子もなく、こんな疑問が湧いて来たことがある。朗説と音楽——一見何のつながりも無いように見える。具体的な表現媒体であるコトバと、抽象的表現ともいえる音楽、この二つの連鎖的なつながりはどこにあるのだろうか。

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ「テンペスト」を聴くと、その激しい和音の積み重ねの中に、風吹きすさぶ自然の猛威から人生の痛哭までを想像させてしまう。デュカの交響詩「魔法使いの弟子」の音色とリズムは、ディズニーをして、ミックキーマウスの軽妙で酒脱な動きを見事にシンクロさせた（映画「ファンタジア」）。

そう見ると、音楽は、人間の感性の中ではまさに具象的であり、更に具象的なコトバでは表現の及ばない、抽象的ともいえる人間の感情やニュアンスの部分をも表現してしまう。

幸田朗説を聴いてみよう。樋口一葉の作品はドラマの世界である。遊郭の街の近くに住む少女美登利は徳華寺の小坊主信如にひそかな想いを寄せるが、当然遠げられる恋ではない（「たけくらべ」）。小説は延々とコトバで述べられ、読者は個々の感性で主人公達の想いに想いを馳せる。

この小説が幸田朗説にかかると、聴衆は頭でストーリーを追いつつも、いつしか幸田オーラという霧に包みこまれてしまう。耳に入って来たコトバはあたかも確證

するJIT機よろしく宙に浮き、まるで音楽を聴いて空想の世界が拡がっていくように、一葉の世界、物語の情景の中に羽を飛ばたかぜ、主人公の心情に己れを重ね合わせて、心おのかせている自分に気付くのである。

幸田朗説こそは（音楽）なのである。

音楽——最近の音楽（特にCDなど録音の世界）はデジタル化が大勢を占めている。シャキシャキとした一見（聴）気持ちよく耳に響く音（音楽）は、しばらく聞き続けていると疲れを覚えてしまう。

先日、世界的なバレリーナ、アレクサンドラ・フェエリの引退公演が、東京文化会館で3日間行われたが、その音楽はオーケストラの生演奏ではなく、録音が使われた。ところがその音源がデジタル録音であったため、バレエを見る以前に、音楽を耳にするだけで頭が痛くなった経験がある（2日目以降は多少改善されていた）。

デジタル録音という技術的進歩が、人の感性に不快感を与えたとしたら、これは明らかに文明の退歩衰退に連がる由々しき事実ではなからうか。

デジタル録音の特色は、音楽を構成する音符の一言一音が、はっきり独立分離されているかのように聞こえる（従ってオーケストラの大会奏などでは、個々の楽器の音が明確に聞き分けられるといった利点につながる）。ところがその一言一音の間にあるべき、何か「が聞こえてこない」のである。即ち、人間の耳が音群

を聞きとってそこから脳で派生的に生じる情感に不足している気がしてならない。音楽の情感は音と音の間から醸し出される。何か（雰囲気）が削り出しているのではないかと思う。

振りかえって幸田朗説を改めて聴くと、聴衆は語られるコトバを耳で追いつつも、そのコトバコトバの間から発せられる幸田オーラに酔いしれてしまうのだ。幸田オーラこそが幸田朗説の最大の魅力なのである。

現在、（朗説）というジャンルはほぼ確立され、朗説会も各種盛んに行われるようになった。幸田朗説が初めて試みられた数十年前は、日本には朗説という催し自体が皆無に等しかった。そこを出発点として数十年間、当然ながら数々の艱難辛苦の道のりを乗り越えて来た幸田朗説の歴史は、自ずから語られるコトバにも磨きがかかり、オーラの魅力もいや増して、聴くものをますます妖術の世界に導いてくれることであろう。今、舞台芸術の枠を彷彿とさせる幸田朗説をここに親しく聴ける幸せは、何にもかえがたい喜びなのである。

コトバという文化をひっさげ、常にトッブを走り、その洗練に日夜打ち込んで来られた幸田朗説に、改めて心からの感謝の念を抱くとともに、未熟なことばながらここにおおなる敬意を捧げます。

トップランナー 萬歳！

（バレエ評論家）



人類の財宝 稀有なる朗読者  
幸田弘子さん

## 大和田葉子

驚き！ 作品の登場人物や作家の霊が完全に乗り移って語りかけて来ている！  
これは演じているのではない！  
初めて、幸田弘子さんの朗読舞台を拝聴拝見させて頂いた時以来、毎度感じる事である。そう感じているのは、私だけではないであろう。しかもたったお一人で、あれだけ大きな古典作品の魂を、次々と現世に甦らせる。諸々の作品が、幸田弘子さんの肉体を通して文字の中からこの世に現れたいと訴えているようにさえ感じる。天才という言葉を「天が命ずるこの世における役割分担の才能」と解釈すれば、幸田さんは、まさにその才能を持ち合わされ、しかも、その才能に甘んじること無く、埋もれさす事も無く、途切れさすことも無く、世のために使われていらっしやる方だと思った。普段、言葉の無い「音」のみの世界に居る私が、「言葉の世界」、しかもこのような超一流の朗読舞台に二聴衆として貴重な体験をさせて頂く事が出来るようになったのは、そもそも團伊玖磨先生を介して知遇を得た三善清達先生のお蔭である。

一方、ソロ演奏が専門の私がまさか、朗読界の大神、幸田弘子先生と舞台上で一緒することになるとは想像もしなかった。夏前、エッセイストの三善里沙子さんを通して突然、「8月1日、軽井沢にいらっしやいますか？」というお問い合わせから、「その日は軽井沢ミュージックサマースクールと音楽祭の初日なので、もちろん、軽井沢にはおりますが何か？」と私。たまたま双方の本番の時間が重

ならないことから、急遽、堀辰雄作品「曠野」に私の無伴奏フルートが入ることに。驚きと喜びが、忙しさの中に消え隠れしながらも感う事無くお引き受けすることになった。「軽井沢」「幸田弘子」「堀辰雄」しかも、「拾遺和歌集から選ばれたテーマで有り、平安時代の一女性の心を中心軸にした物語の『曠野』……、私にはすべてが幼少からの親しみと興味が有り、極めて特別な意味を持つ響きであったから。更にびんと来たのは、作曲家の坂田潤隆先生のこと。氏は私の音を最も良く理解されている作曲家の一人で、しかも幸田先生がNHKで朗読なさり始められた頃からのファンでもおられることを知っていた。過日、日中文化交流協会でお二人が遭遇された折、氏の感激様は格別であった。幸い、幸田先生のご快諾で即決。短期間ながらも具体的な検討と実施が成功。

追隨を許さない演奏や舞台に出会うことは数限られる。何故ならそれに伴う必須条件が真に揃う事が中々難しいからである。ところが今回は全てが揃っている。更に、堀夫人とは既に軽井沢の本番で空気を共有させて頂いた上に行なわれるこの東京公演、益々意味深いものと思う。会場の皆様、ご支援者の皆様と共に、幸田弘子さんの御身を通して繰り広げられる作者や作品に潜む更なる新たなメッセージを、舞台上で静かに共有させて頂けることに感慨深い喜びを感じている。尊敬と感謝を込めて。

(フルーティスト)





## 三善里沙子

運命に翻弄される日本の女二人、「蕨野」のおんなど、「にこりえ」のお力、時代も立場も違うものの、共に貧しさという境遇と、男によって振り回されていく。一つの両車が狂い、その両車が回り続け加速して迎える悲劇は、聞く者の心を打たずにはいられない。

今回のヒロインはこの二人だが、以前から私は「にこりえ」とともに「カルメン」を比較してみていた。お力とカルメン、ともに男好きのする、仇な、すこぶるつきのいい女である。もちろん、煙草工場で働く奔放なジプシーのカルメンに対して、お力は、生きるために媚を売らざるを得ない身であるのだが。

二つの作品のヒロインも、どこか似ている。「にこりえ」の、リッチで金離れ良き、大人で紳士然とした結城朝之介。こんな渋い男がいたら、今も花柳界などでもてるだろう。また、「カルメン」には闘牛士の英雄・エスカミリオが、勇猛な歌とともに登場する。今でいえば、サッカークラブのベッカムのようなスターだ。

要するに、二人は金や名声を持った、女にもてるいい男であり、いわゆる勝ち組の記号として描かれる。いっぽう、負け組として出てくる重要人物は、「にこりえ」の源七と、「カルメン」のドン・ホセ。

源七は、お力に入れ揚げたあげく、家業もうまくいなくなり、妻子を追い出し、一家離散の身の上となる。竜騎兵隊の伍長だったドン・ホセは、罪人となったカルメンを逃がしたばかりではなく、とうとうカルメンの密輸団の仲間にもまて入れられてしまう。悲惨である。女にすら会わなければ、プチブルな源七も貴族

の血筋のホセも、墜ちなかったのだ。

しかも、すべてを捨てた二人の男に、ファム・ファタール(運命の女)は冷たい。お力は、源七を袖にして朝之介に、カルメンは同じように、ドン・ホセからエスカミリオになびいていくのだ。

当然、それまでにお力に尽くした源七や、ドン・ホセはいたたまれない。いや、すべてを失った二人の男が、ただ一つ残された希望である女を手に入れようとするれば、それぞれ、聞より暗い情念を燃やすことしかできなくなるのである。

そうしたことで、私は、むしろ運命に翻弄されているのは、運命の魔手に操られているのは、二人の男のような気がしてならない。

お力は源七の剣容さを知り、カルメンには死のカードが出ているのに、それぞれ、もはや狂人と化したような男をなだめようともしないのだ。

諦念が強さか、愛か、死を覚悟しているのか、お力もカルメンも、運命に抗っているのか受け入れているのか、人は破壊すらも望むのか、毎回そのところが面白い。

「カルメン」が日本で初演され、話題になったのは大正八年、「にこりえ」は明治二十八年初出だから、おそらく一葉さんは、カルメンを知らないだろうが、運命は時と処を超えて、人をその渦の中に巻き込んでいくのだ。

(エッセイスト)

